

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：35314

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13207

研究課題名(和文)漢語連濁の新視点：史的研究から見えてくる音韻と語彙の境界

研究課題名(英文)A New Historical Point of View on Vocabulary of Chinese Origin: the intermediate field between phonology and lexicology

研究代表者

呂 建輝(LU, Jianhui)

環太平洋大学・経営学部・講師

研究者番号：20803737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：連濁は基本的に和語(日本固有の大和言葉)にしか起こらない音韻現象とされている。しかし、漢語(古代中国に由来する発音で読まれている言葉)にも連濁が起こることがある。本研究では、歴史上の語彙の変遷過程を明らかにすることで、漢語が連濁する規則を探った。一例として、連濁しているように見える「文庫本(ほん)」などが挙げられる。本研究で考察を行った結果、「本」が名詞(文庫など)に付くとき必ず濁音「ほん」になることがわかった。これに対して、「山」が名詞(富士)に付くとき必ず清音「さん」で読まれることもわかった。古代においては音韻現象であった連濁が、現代になって濁音・清音の語彙として定着した一面が垣間見えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「連濁」は日本語によく見られる音韻現象である。しかし、連濁はどんなときに起こり、どんなときに起こらないかの規則は未だに解明されていない。本研究で史的研究という視点から、漢語の語彙を対象に連濁規則のある程度明らかにすることができた。特に、これまで音韻現象の一つとされている連濁は、現代語においては語彙として定着したものがあることが明らかになった。今後の連濁研究は、音韻論だけでなく語彙論からのアプローチの可能性も考えられるだろう。本研究の研究成果は、日本語学基礎研究に寄与するほか、外国人向けの日本語教育、辞書の編纂、自然言語処理等の分野にも大いに貢献するものと思われる。

研究成果の概要(英文)：It is considered that Rendaku is a common phonological phenomenon of vocabulary of Japanese origin. However, we can find some cases of Rendaku also in vocabulary of Chinese origin. In this research, we try to find the rules of those Rendaku words of Chinese origin by their historical transitions. For example, BUNKO-BON(a pocket sized book) seems to be composed by BUNKO(a library) and Rendaku form of HON(a book). In this research, we find that BON is the only available form when following a noun. Besides, we also find a similar case from SAN, the non-Rendaku form of SAN(a mountain), which is available only when following a noun, such as FUJI-SAN(Mt. Fuji). Therefore, we can say that some Rendaku forms and non-Rendaku forms have become lexical morphemes nowadays, although Rendaku has been being a phonological phenomenon in history.

研究分野：人文学(言語学、日本語学)

キーワード：音韻論 形態論 語彙・意味 日本語史

1. 研究開始当初の背景

連濁とは、「はな(花)→くさばな(草花)」のように、本来語頭が清音だった語が、他の語の後ろにくるとき濁音になる音韻現象である。一方、連濁はいかなる場合でも起こるものではなく、「はな(花)→はつはな(初花)」のように連濁が起こらない場合もある。連濁はどういった条件の下で起こるかに関しては、未だに不明な点が多い。連濁の研究が進むことにより、日本語学の研究のみならず、日本語非母語話者向けの日本語教育や、自然言語処理といった分野にも大いに貢献できるものと考えられる。

先行研究では、連濁は和語(日本固有の大和言葉)に起こりやすく、漢語(古代中国語に由来する漢字音で読まれる言葉)に起こりにくいという指摘がある。しかし、少数ではあるが、「りゅうざん(流産)」「おおぜい(大勢)」といった漢語にも、連濁が起こるケースが見られる。連濁が起こる漢語について、呂(2014)、呂(2015)が史的変遷の面から考察することによって、「～産」「～勢」に連濁が起こる要因を明らかにした。

従来では、現代語を中心に連濁条件を探るといった共時的研究が多いが、歴史上の成立過程を明らかにする通時的研究も同時に行うことで、連濁問題を見直すことができ新たな発見につながると考えられる。呂(2014)、呂(2015)では「～産」「～勢」という2語を対象にしか考察できず、漢語全体の連濁体系が未だに見えなかった。本研究では、さらに「～本(ほん/ぼん)」の連濁の史的変遷を考察し、漢語が連濁する要因を明らかにする。

2. 研究の目的

(1) 「～本」の連濁条件の再考察(共時的考察)、および「～本」の連濁の史的変遷(通時的考察)

先行研究によると、「～本」の語彙は、4拍語以下の場合には連濁せず(絵本:えほん、古本:ふるほんなど)、5拍語以上の場合には連濁する(文庫本:ぶんこぼん、攻略本:こうりやくぼんなど)。しかし、「江戸本:えどぼん」「猫本:ねこぼん」のように4拍以下の語でも連濁が起こることがある。そこで、本研究でまず現代語における「～本」の語彙の連濁条件を再考察する。その後、「～本」の連濁の史的変遷を考察し、現代での連濁条件が成立する要因を明らかにする。

(2) 「接尾語」の定義の再考

接尾語とは、単独では用いられず、他語に後接して文法的役割を果たす語彙カテゴリーである。例として、変化過程を表す「～化(か)」、他品詞を形容詞に変換する「～的(てき)」などがある。接尾語になった「～化」「～的」は、本来の語彙の意味「ばける」「まと」が薄れている。一方で、呂(2014)が取り上げた「北海道産」「中国産」の「～産」、呂(2015)が取り上げた「日本勢」「アメリカ勢」の「～勢」などは、専ら他語に後接して用いられる性質は接尾語に似ているものの、本来「産」「勢」字の持つ「産出」「軍勢」という語彙の意味が残っている。また、「文庫本」「攻略本」の「～本」も、「書籍」という意味で、同じく語彙の意味が残っていると言える。こういった例の存在を考え、従来の「接尾語」とは異なるものの、性質が近似する「もう一種の接尾語」の存在を考察する。

(3) 音韻論と語彙論の接点を考える

そもそも連濁が起こりにくいとされている漢語は、なぜ連濁が起こる語も存在しているか。この問題を明らかにするために、上記2(1)(2)に加え、更に和語の連濁との関連性を考察する。従来、連濁は音韻現象の一つとされているが、2(2)に掲げた「～産」「～勢」「～本」の接尾語的用法の存在を考えると、語彙現象の一つとして考えなければならないことになる。歴史上の音韻現象であった連濁がどういったような経緯で接尾語という語彙現象へと発達したかを明らかにし、漢語の連濁現象の位置づけを再考する。

3. 研究の方法

2(1)「～本」の連濁条件に関する考察で、現代語を対象とする研究では、『NHK 日本語発音アクセント辞典』に収録された「～本」の語彙に、さらに先行研究で解明されなかった例外を加えた語例を研究対象とする。2(2)接尾語的用法という可能性はないかの検証をしつつ、現代語における「～本」の連濁条件を再考察する。一方、史的変遷を対象とする研究では、各時代の文献に出現した「～本」を収集し、その一つ一つの語例に対して清音「ほん」だったか濁音「ぼん」だったかを確認する。「本」の表す意味の変化にも注目し、連濁条件の変遷を明らかにし、現代日本語における連濁条件が成立した要因を考察する。

2(2)「接尾語」の定義に対する考察では、「～産」「～勢」「～本」と同じような接尾語的用法を持つ漢語要素を集め、それらに共通する形態上の特徴を明らかにする。さらに、一般的に「接尾語」とされている漢語要素と、本研究で主張する「もう一種の接尾語」との違いを明示し、「もう一種の接尾語」の定義を行う。接尾語的用法を持つ漢語要素の収集の際、野村雅昭(1978)

「接尾辞性字音語基の性格」(『電子計算機による国語研究IX』国立国語研究書報告 61)に取り上げられた字音語基を参考にする。

2(3)音韻論と語彙論の接点の考察では、まずこれまで行ってきた史の変遷の考察から、漢語連濁の歴史および現代における連濁条件に見られる共通点を見出し、古代における音韻現象がいかに現代の語彙現象へと変容したかを明らかにする。他方、基本的に連濁が起こりやすいと言われる和語の中にも、一部連濁が起こらない語彙がある。これらの語彙に対する考察を行い、連濁が起こらない要因を探り、漢語の連濁との関係を分析する。そこから、連濁という現象において漢語の連濁はどのように位置づけられるかを再考し、本研究課題の最終結論とする。

なお、本研究期間中においては、上記2(1)、2(2)、2(3)に加え、さらに同じく漢語の語彙に属する「～山(サン/ザン)」の連濁の史の変遷に対する考察も行った。2(3)音韻論と語彙論の接点を考える際、古い日本語の音形が現代日本語に残存しているものが多いと言われる固有名詞(山名)の考察も必要不可欠だと考えたからである。史の変遷に関する考察であるため、2(1)「～本」の連濁の史の変遷の研究と同様な手法を採用する。つまり、各時代の文献に出現した「～山」の用例およびその清濁の情報を集め、「～山」の連濁条件の変遷過程を明らかにし、現代における連濁条件を考察する。ただし、研究対象とする「～山」の語例は基本的に山名(固有名詞)であるため、現代語の語例を集める際には、山名辞典等に掲載された情報も参考にした。

4. 研究成果

(1)「～本」の連濁条件の再考察(共時的考察)

「～本」を後部要素とする語彙を現代語辞書より収集し考察を行った。その結果、濁音形「～ボン」をとるときは、書籍を類別する用法であることがわかった。具体的には、どの種類の書籍に当てはまるかを分別する意味用法では、濁音形「～ボン」になる。例えば、書籍を内容で類別するときには「猫本：ねこ-ぼん」「漫画本：まんが-ぼん」など、刊行時期で分別するときには「江戸本：えど-ぼん」「昭和本：しょうわ-ぼん」などが挙げられる。2(1)で述べた先行研究の指摘(4拍以下の語か5拍以上の語か)に関わらず、一律濁音形「～ボン」をとっている。これに対して、書籍の意味に該当しない「～本」は、清音形「～ホン」になる。例えば、「見本：み-ほん」「基本：き-ほん」などである。また、書籍の意味に該当しても、イ形容詞や動詞連用形が前接している場合は、清音形「～ホン」となる。例えば、「古本：ふる-ほん」「折本：おり-ほん」などである。4(3)で後述する呂(2018b)では、接尾辞的な性質をもつ漢語系形態素のことを「接尾辞性字音形態素」と称し、基本的に名詞、サ変動詞、ナ形容詞といった、漢語にしかありえない品詞に接続するとの結論が得られた。この観点で見ると、イ形容詞や動詞連用形に接続すると清音形になる「～本」は、書籍を類別するための接尾辞性字音形態素「～ボン」をもっていることができる。

つまり、連濁しているように見える「～ボン」は、実は接尾語的な用法(接尾辞性字音形態素)である。書籍の類別という用法であれば、連濁するかしないかを考慮せず一律に「ボン」が付く。この接尾語的な用法を除くと、「本」は基本的に連濁が起こらない。

以上の研究成果は呂(2018a)にまとめている。ただ、研究の進捗状況が予定より早く、本助成の交付決定の前に当該業績の掲載が決まった。事務手続き上では本助成による研究成果とするのに無理があったが、本研究内容の一部でもあり、かつ本助成の申請が大きな励みとなった。記して感謝申し上げる。

(2)「～本」の連濁の史の変遷(通時的考察)

上記4(1)の結論から、「～本」の濁音形「～ボン」は現代で接尾語的な用法(接尾辞性字音形態素)となっていることが分かった。なぜ現代で接尾語的な用法(接尾辞性字音形態素)が成立しているかを明らかにするため、本研究でさらに「～本」の連濁の史の変遷を考察した。古代においては「本」はもともと「書籍」の意がなく、「手本」の意で使用されていた。当時の「～本」は、一部鼻音前接の語を除き、基本的に連濁が起こらなかった。中世より「書籍」という意味用法が徐々に形成されつつあった。当時は同じく「書籍」の意を表すもので、もともと「書」という漢語が存在していた。こうして、古くから書籍の意を表す「書」は依然として格調高い書籍(学習書、研究書など)に用いるのに対して、新しく書籍の意味用法を獲得した「本」は日常的で手軽に読める書籍(浄瑠璃本、狂言本など)に用いる、という使い分けができた。用法上の手軽さから、和語に類似する性質を持っているため、和語のように連濁が起こり「～ボン」という濁音形が誕生した。一方、「本」の用法上の便利さから、濁音形「～ボン」は様々なジャンルの書籍に用いることにより、「～ボン」という濁音形が江戸時代において一般化し、やがて接尾語的な用法(接尾辞性字音形態素)へと変容した。呂(2018b)では、接尾辞性字音形態素は基本的に名詞、サ変動詞、ナ形容詞に接続すると説明した。これに当てはまらないイ形容詞前接の「古本」、動詞連用形前接の「書き本」などは、江戸時代においては確かに濁音形の「～ボン」があった。ところが近代以降、清音形「～ホン」へと変わった。接尾辞性字音形態素にふさわしくない例として濁音形「～ボン」の語彙から追い出されたと考えられるが、この事象こそ、接尾辞性字音形態素「～ボン」が近代以降に成立した証拠になると考えられる。

このように、「～本」は古代において基本的に連濁しなかった語彙だったが、手軽に扱える「書籍」の意が発生することにより、連濁が起こるようになった。その後、連濁形「～ボン」が大量

に発生し、音韻現象としての連濁が形骸化していく。その結果、濁音形「～ボン」が現代において書籍を類別する語彙として定着している。

以上の研究成果は呂（2021）にまとめている。

(3) 「接尾語」の定義の再考

前記4(1)から、濁音形「～ボン（本）」が接尾語的な用法（接尾辞性字音形態素）を持っていることが明らかになった。しかし一般的な漢語系の接尾語とは、文法的意味を持つことにより語彙の意味が薄れるものである。例えば、「世界的」の「～的」はもともと「まと」の意を表す語彙だったが、接尾辞として用いられるときは、「まと」という語彙の意味を失くし、代わりに前接語の品詞をナ形容詞に変えるという文法的意味を持つようになっていく。一方、「～ボン（本）」も接尾語的な用法になってはいるが、本来持つ「書籍」という語彙の意味は失われていない。本研究では、従来「～的」のような接尾語だけでなく、「～ボン（本）」のようなもう一種の「接尾語」も研究対象としているため、この二種類を合わせて「接尾辞性字音形態素」と呼ぶ。

本研究でさらに「接尾辞性字音形態素」の形態上、どのような語彙に接続でき、どのような語彙に接続できないか、前接語の特徴を考察した。その結果、「接尾辞性字音形態素」は名詞、サ変動詞、ナ形容詞に付き、それ以外のイ形容詞、動詞連用形などには付かないことが明らかになった。漢語は基本的に名詞、サ変動詞、ナ形容詞という3品詞しかないことを考えると、「接尾辞性字音形態素」は漢語に最も親和性を持っていることが分かる。「接尾辞性字音形態素」の造語力の強さから、現代では和語、外来語にも付くようになった。但し、「接尾辞性字音形態素」が和語、外来語に接続する場合も、漢語にあり得る品詞（名詞、サ変動詞、ナ形容詞）の語にしか付かない。

このように、接尾語的な用法を持つ漢語、つまり「接尾辞性字音形態素」は、名詞、サ変動詞、ナ形容詞にしか付かないことが明らかになった。

以上の研究成果は呂（2018b）にまとめている。ただ、研究の進捗状況が予定より早く、本助成の交付決定の前に当該業績の掲載が決まった。事務手続き上では本助成による研究成果とするのに無理があったが、本研究内容の一部でもあり、かつ本助成の申請が大きな励みとなった。記して感謝申し上げる。

(4) 連濁しない和語の特徴

連濁は和語に起こるもので、漢語には基本的に起こらないとされている。それでも、歴史上の事情があり、現代において濁音で用いられる漢語があることが、呂（2014）、呂（2015）、呂（2018a）、呂（2021）からわかった。一方、基本的に連濁が起こるとされている和語の中にも、連濁が起こらない語彙がある。漢語の連濁との対照分析をするため、連濁しない和語の特徴を考察した。

その結果、和語の複合語で「助詞を入れたり活用形を変えたりしても意味に大差が生じない」場合は、連濁が起こらないことがわかった。例えば、連濁する「赤蛙：あか^がえる」はある特定の種類の蛙のことである。イ形容詞の活用語尾「い」を入れて「赤い蛙」にすることはできるが、「赤い蛙」は必ず「赤蛙」ではない（赤色が赤蛙という種類の蛙を弁別する特徴の一つではあるが、色と蛙の種類の間ではイコール関係をなしていない）。これに対して、連濁しない「右踵：みぎ^かかと」は、助詞「の」を入れて「右の踵」にすることができ、「右踵」と同義である。本研究では、以上述べた「助詞を入れたり活用形を変えたりしても意味に大差が生じない」というような語構成を「語の並置」と呼んでいる。このように、「語の並置」によりできた和語の複合語は連濁しないことが明らかになった。この研究成果は呂（2020a）にまとめている。

また、「泥鯱搦い：どじょう^すくい」のように、複合語中において、後部要素が動詞連用形で、前部要素がその目的格である場合は基本的に連濁が起こらないとされている。なぜこのような和語に連濁が起こりにくいのか分析してみたところ、前部要素のほとんどが具象名詞であることがわかった。意味上具体的な行動を表す場合、意味がぼやけていて多義的に捉えられるという和語本来の性質から離れるため、連濁が起こらなくなったと考えられる。このように、形態上では和語であっても、意味用法上では和語らしくないものには連濁が起こらないということが明らかになった。この研究成果は呂（2020b）にまとめている。

(5) 漢語連濁の全体像

古代において、漢語は鼻音が前接する場合のみ連濁が起こっていた。後に、和語が漢語に前接するようになり、鼻音の前接がなくても連濁が可能となった。4(4)で述べたように、語構成や意味用法上、典型的な和語（和語らしい和語）と典型的な漢語（漢語らしい漢語）の間には境目が存在する。しかし和語が漢語に前接することにより、語構成または意味用法上、和語らしくない和語、漢語らしくない漢語が出現した。その結果、本来連濁が起こらないとされる漢語にも連濁が起こる語彙が現れ、連濁が起こるとされる和語にも連濁が起こらない語彙が現れた。さらに、4(1)(2)で考察した「～ボン（本）」のように、同じ意味用法の語彙が大量造語により、濁音形が拡大する事象も観察される。最初は連濁によりできた濁音形でも、類推（同じ後部要素を持つ他の語への波及）作用により、後に4(3)で述べた「接尾辞性字音形態素」に変わるものがある。「接尾辞性字音形態素」となると、音韻現象としての連濁は意味を失くし、語彙現象へと発達する。

このように、漢語の連濁はもともと鼻音前接という音環境に影響される音韻現象であったが、意味用法上、典型的でない漢語が出現すると、和語のように連濁が起こる。この濁音形の大量発生により、連濁は形骸化し、語彙として定着していく。これが、「連濁しているように見える」漢語が存在する所以であると結論付けられる。この研究成果は呂（2022b）にまとめている。

(6) 「～山」の連濁の史的変遷

研究の進捗状況が予定より早かったため、漢語の連濁研究としてさらに「～山（サン／ザン）」の語彙の連濁に対する考察を行った。「～山」は、これまで考察した「～産」「～勢」「～本」と同じく漢語の連濁にあたるが、山名や人名といった固有名詞として使用されることが多いという点では、これまでとは異なる発見が期待できると考えたからである。先行研究によると、「～山」は一般名詞（火山：か-ざん など）、人名（林羅山：はやし ら-ざん など）に使用されるときは連濁する。一方、山名に使用される場合は連濁が起こりにくい（富士山：ふじ-さん など）との指摘もあった。しかし、「比叡山：ひえい-ざん」「大雪山：だいせつ-ざん」など、濁音形「～ザン」をとる例も数多く見られる。

そこで本研究では、これまでの「～産」「～勢」「～本」と同様な研究方法を採用し、史的変遷の視点から山名に用いる「～山」の連濁条件を再考察した。「～山」は古く鼻音の前接がある場合のみ連濁が起こっていた。しかし、安土桃山時代より鼻音の前接という連濁条件が徐々に崩壊しはじめ、鼻音の前接がないにもかかわらず濁音形「～ザン」をとる語が増加した。一方、このような流れの中、古くは濁音形で使われたものが現代で清音形に変わったり（六甲山：ろっこう-ざん → ろっこう-さん など）、古くは清音形で使われたものが現代で濁音形に変わったり（驪山：り-さん → り-ざん など）する動きが見られた。これら清濁の変化があった語の特徴を分析したところ、現代で清音形になっている「～山（サン）」は、その前接部が単独でも固有名詞としての機能をもつ語であることがわかった（○ 六甲 など）。これに対して、現代で濁音形になっている「～山（ザン）」は、その前接部が単独では固有名詞としての機能を持たない語である（× 驪 など）。前者、つまり「～山」の前接部が単独でも固有名詞としての機能を持つ語は、意味用法上 4 (3) で述べた「接尾辞性字音形態素」にあたる。つまり、固有名詞を前接し山名を指し示す「接尾辞性字音形態素」は一律清音「～サン」である。この「～サン」は語彙として定着した産物であるため、音韻現象としての連濁は機能していない。接尾辞性字音形態素「～サン」を除けば、「～山」は基本的に濁音形「～ザン」になる、という結論を得た。

この研究成果は第 124 回国語語彙史研究会で口頭発表をし、いただいた意見を基に加筆修正をした後、呂（2022a）にまとめた。

なお、「～山」の連濁研究を通して、「前部要素が固有名詞としての機能を持つかどうか」という、固有名詞にしか見られないポイントがあるのに気づいた。今後の研究においては、普通名詞だけでなく、人名や地名といった固有名詞に対する考察も必要になってくる。固有名詞の多くは古い日本語の状態を保存していると言われている。古い日本語がどのようにして現代日本語へと変遷してきたかを明らかにするためにも、固有名詞の連濁に対する考察が不可欠であり、これを今後の課題としたい。

最後になるが、以上の研究成果が得られたのも、科研費による助成に負うところが大きい。本研究は歴史研究にかかり、史料がなければ始まらない。此度のコロナ禍により史料の調達が困難を極める中、本助成のおかげで必要な史料が無事に利用でき、研究が順調に進み、研究成果の発信につながった。ここに記して心より深謝申し上げる。

〈引用文献〉

- 呂建輝（2014）「漢語連濁の史的変遷：後部要素が「産」の漢語について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37号 pp. 129-147
- 呂建輝（2015）「漢語連濁の通時的考察と接尾辞化：「～勢」の場合」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』40号 pp. 107-124
- 呂建輝（2018a）「「～ホン（本）」の連濁について：現代語を中心に」『西日本国語国文学』5号 pp. 30-39
- 呂建輝（2018b）「接尾辞性字音形態素の前接要素の語彙制限について」『環太平洋大学研究紀要』13号 pp. 37-45
- 呂建輝（2020a）「連濁しない和語の側面」『環太平洋大学研究紀要』16号 pp. 57-64
- 呂建輝（2020b）「動詞連用形の連濁と語構成：目的格関係の場合」『環太平洋大学研究紀要』17号 pp. 109-116
- 呂建輝（2021）「本（ホン）の連濁における史的変遷」『国語語彙史の研究』40集 pp. 270-288
- 呂建輝（2022a）「字音形態素「～山（サン）」の連濁：山名の史的変遷から」『国語語彙史の研究』41集 pp. 242-260
- 呂建輝（2022b）「漢字音の連濁」『環太平洋大学研究紀要』20号 pp. 75-82

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 呂建輝	4. 巻 16
2. 論文標題 連濁しない和語の一側面	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環太平洋大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.57-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 呂建輝	4. 巻 17
2. 論文標題 動詞連用形の連濁と語構成 目的格関係の場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環太平洋大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.109-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 呂建輝	4. 巻 四十
2. 論文標題 本（ほん）の連濁における史の変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語語彙史の研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 呂建輝	4. 巻 四十一
2. 論文標題 字音形態素「～山（サン）」の連濁 山名の史の変遷から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語語彙史の研究	6. 最初と最後の頁 pp.242-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呂建輝	4. 巻 20
2. 論文標題 漢字音の連濁	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 環太平洋大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.75-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 呂建輝
2. 発表標題 「～山」の連濁の史的変遷 山名を中心に
3. 学会等名 第124回国語語彙史研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関